

### 3) コーディネーター研修

「すこやかネットコーディネーターが語る～楽しい「教育コミュニティ」づくり」

平成 21 年 12 月 9 日 (水) 14:00～16:00 / 18:30～20:30 弁天町市民学習センター 講堂

講師：明貝 一平さん

(田尻中学校区地域教育協議会地域コーディネーター・OSAKA きっずなー会長)

#### (1) 大阪府の教育コミュニティづくりについて

平成 11 年の大阪府の社会教育委員の提言書に「教育コミュニティづくり」を進める必要性について、大阪大学の池田寛先生が提言され、それを受けて、平成 12 年から「すこやかネット」を 3 年間で府内のすべての中学校区に作るようになった。



また、その後、その推進役を養成する「地域コーディネーター養成講座」が開かれ、5 年間で約 1,000 人を養成。

当時は大阪市をのぞく府内 334 の中学校区に「すこやかネット」を開設。いまは政令市になった堺市ものぞいた 291 校に設置されている。

教育コミュニティづくりで大切なのが、学校・家庭・地域が「協働」しながら取り組んでいくということ。

「協働」と「協力」は違う。

「協力」は、頼む側の都合で動くことになるので、頼まれたほうは「しゃーないな～」と仕方なしに動くことになり、なかなか長続きしない。

「協働」は、両方のメリットになるように物事を進める手法。どちらも「やってよかったな～」と思えるやり方をするということ。そのほうが、長続きする。

その結果、地域の中で、人の顔と名前が一致する関係を作るとというのが、「教育コミュニティ」づくりの最終目標。これを地域全体でできればというのが、池田先生がめざしていたこと。

池田先生は、すこやかネットの 4 つの理想像を挙げていた。その中の一つが、「子どもや青少年による社会貢献の機会を提供できている」ということ。子どもたちが、自分たちも社会の役に立っているんだと思える機会を提供できていることが、「すこやかネット」の理想像の 1 つとされていた。

いま、田尻町では、そんなことをめざして活動している。

#### (2) 田尻町とは？

関西空港の海に面した小さな町。関西空港を 3 つに切った真ん中も田尻町になっているが、人が住んでいるところは滑走路よりも小さい。(笑)

人口は 8,000 人ちょっと。保育所・幼稚園・小学校・中学校が一つずつ。運動場は小学校と中学校が共有。その向かいに一元化された保育所と幼稚園がある。

### (3) 田尻町すこやかネットの取り組みについて

田尻町のすこやかネットは、「たじり t r y ・ あんぐる」という名称。

いろんな視点で見ていきたい「アングル」や、何事にも挑戦していこうという思いで名づけた。役割は、校区内の連絡調整、地域教育活動の活性化、学校支援。

構成団体は、各校園長、担当の先生、PTA会長、子ども会、青年団、青少年指導員、体育協会、ボランティア連絡会、婦人会、食生活改善推進委員会など。立ち上げは平成13年。現在、3つの専門部会と事務局で活動している。

#### 1. 子どもの居場所部会

簡単に言うと“学校開放”の活動。名称は、「たじりドキドキ広場」。

活動そのものは、すこやかネットの立ち上げ前から始まっていたが、平成14年からの学校週5日制を受けて開始。当時、小学校のPTA会長だった僕に、田尻町役場の社会教育課長が、4月から土曜日の午前中に学校を開きたいので、その役をやってくれへんかと頼んできた。それで、なにも考えずに引き受けたのがはじまり。



#### (立ち上げ期)

金曜日の夜に役場に学校のカギを借りに行き、翌朝9時に学校を開けた。

「どんな子どもが来るかな?」「どんな遊びしようかな?」とワクワクしながら待ってたら……………結局、誰も来なかった。週明けに課長に「誰も来なかったで」と言うたら、「ああ、そういやまだ誰にも言うてないわ」って。(笑)

「そらあかんわ~。ちゃんと言うといてや~」と言った次の週。「今度は大勢来るやろな~」と、楽しみに楽しみに待っていたけれど……………やはり誰も来ず。結局しょうがないので、自分の娘を連れて行って、コマなし自転車の練習を運動場一人占めで練習することに。4~6月まで、全然誰も来ないので、娘はどんどん上達していった(笑)。課長に「もう、やめよか」と言ったが、「まあまあ、夏休みまでは」と言われてとりあえず続けていたような状態だった。

そんなある日、老人クラブの山田のカズさんがカブでやってきてくれて、「いままで、誰も来てないんか。ほな、わしが連れてきたるわ」と言うてくれた。

「ほんまに連れてきてくれるんやろか」と思っていたら、30分ぐらいで連れてきたのが5年生ぐらいの子どもが数人。テニスをするところを探していたが、近くの公園には野球をやっている子がたくさんあって、やるところがなかった。そのときに、カズさんが「学校が使えるで」と声をかけてくれたとのこと。子どもたちは、「ホンマに学校使って遊んでええんけ?」と、はじめは半身半疑。いつもは、先生が笛をふかないとボールにも触れなかった学校で、好き放題遊べる。それで、子どもたちは目を輝かせて、体育館でバスケットを始めた。帰りには、「ホンマに楽しかった。みんな連れてきてええん?」「おお!ぜひ連れてきてくれや」という話に。

それで、その次の週からは、雨でも雪でも常に子どもが 30 人以上は来るようになった。イベントがあれば 150 人ぐらい来る。いまでは平均 80 人ぐらいが来ているような状態になっている。

( 発展期 )

1 年間は、僕一人でバスケットやドッジボールをしていたが、50~60 人になると、さすがにひとりではとても見きれない。それで、いろんな人に、ボランティアをお願いすることにした。

その中で来てくれたのが、大正琴のおばあちゃんグループ。頼むと快く引き受けてくれた。ただ、当日おばあちゃんたちが家庭科室で待っていても、子どもたちは誰一人寄りつかない。帰るときには、「こんなやつたら来てもしゃーないし、もう来んでええか? 」と言われてしまった。「来週もお願いします」とは言うたものの、どうするか・・・考えたところ、別のところで、そのおばあちゃんたちが土日の練習場所を探しているという話を聞いたので、「もう子どもたちに教えんでもええわ。自分らの練習場所として学校の部屋を使ってもらうだけでええから。暇があったら子どもらに教えたって」と言うてみた。そしたら「そらええな。場所探しとってん」と、次の週も来てくれることになった。

一斉に曲を練習し出すと、やはり 10 台もあるとええ曲に聞こえる。特に、校門から入ってくるときによく聞こえる。それで、子どもが「なんやろう」と教室をのぞくと、おばあちゃんらが「なんや、一緒にやるか」と声をかけ、僕がのぞいたときには 10 人ぐらいの子どもが教えてもらってた。なんで今日うまいこといったんやるとあらためて考えてみると、「教えたらう」という構えた気持ちではなく、自分のための居場所やと思って「まあ、なんかあったら教えたったらええやんか」の軽い気持ちで来てもらったことが、結果として大きかったのかなと思った。誘い文句一つで物事が大きく動くことがあるんやな~と思う出来事だった。



今は、他にもビーズ教室の人や、体育指導員の人たちなど、さまざまな人が来てくれている。中にはソフトバレーをやっているおばちゃんも。はじめは孫を連れてきているだけだったが、「また来てね」と言うと、「趣味でソフトバレーやってんねんけど、それもやってもええの? 」と。翌週からは、肘や膝にサポーターをつけたバリバリ

のユニホーム姿で、仲間と二人で来てくれて、子どもたちと一緒に試合をしたりと、毎週楽しんで来てくれる。

そんな感じで、はじめは「子どもの居場所」ということではじめた取り組みだったが、実は「大人の居場所」になっていることに、だんだん気づいてきた。

今では、こちらからというよりも、各種団体のほうからいろいろと声がかかるようになった。特に他の団体に支障がなく、参加者が皆好き好きに遊んでいるこのゆる~い雰囲気さえ OK ならば、どんどん来てもらっている。多いときは 6~7 団体がひしめいてるときもあるぐらい。

(さまざまな思い出)

今年の春からは「ちょボラ」というのをはじめた。手作りのボランティア手帳を作り、毎回僕の考えたボランティア活動をする。活動を終わったら、手帳にハンコを一つ押す。それが10個貯まれば、100タージというエコマネーと交換できるシステム。ちなみにエコマネー(地域通貨)は、まちのNPO「田尻町まちづくり住民会議」というところが平成12年からやっている。ちなみに言い出しっぺは僕。(笑)

毎週毎週いろんなボランティアをやっている。先週は、もらったB級の軍手の修理をした。B級なので、指と指のところがつながっていたり、ほつれていたりで、それを直していく。ちゃんとうまく針と糸で直してくれた子どもにはハンコを3つあげる。ほかには、校庭の草ひきや、隣のお宮さんの落ち葉拾い、参観日の前の週は保護者の使うスリッパ拭き、とか。子どもたちは、そのタージを使って、焼き芋大会の焼き芋を食べれたり、夏のイベント「エエ子フェスタ」で縁日遊びができるので、ゲーム感覚で楽しみながらやっている。人数は入れ替わり立ち代り10人くらい。女の子が多いが、たまに男の子も参加してくれてる。ただ、10~15分するとだんだん飽きてきて、鉄棒とかで遊びだす子も出てくる。でも、草ひきしてたある日に一人の子どもが、「お前らなにやってんねん。俺らの学校なんやから、俺らできれいにしよや」と、めちゃうれしいことを言うてくれた。その子がどんなつもりでそういうことを言うてくれたかわからへんけど、そういう発想をしてくれる子がいるようになったのが、「ちょボラ」をしてきた成果なんかかなと思っている。

今日、学校の先生はおられる? スイマセン。以前、仲の悪い校長先生にえらい悔しいことを言われたことがある。平成15、16年くらい、学校開放が絶好調のときで、校庭が運動会のようなことになっているときに、突然「あんた何様のつもり。コーディネーターって、なんぼのもんやの。勝手に養成講座受けてきただけやのに、何えらそうな顔して学校に来てんのん」と言われた。直接言われたのは、一緒にコーディネーターをやっていた仲間だったが、それを聞いて家で思わず泣いてしまった。教育委員会に行って、「あんな言われるくらいやったら、もうやめるわ」と言うたくらい。僕はなだめられてまだ続けているけど、その仲間はそれでやめてしまった。とても悔しい思い出。そのあとは、いい校長先生が来ていて、楽しくやれている。

あと、一般の先生も入ってくれている。その先生は、すこやかネットの担当になったこともあって、毎週のように学校開放に来てくれてたが、「学校で見せてくれへん子どもの顔が見れて、とても勉強になるわ」と喜んでた。普段の子どもの姿を先生に見てもらうのもいいことなんかかなとも思っている。

うちの学校開放は、本当に公園と一緒に。違うのは、来たときに名簿に名前を書いて、帰るときにチェックするということだけ。本当に次から次にやりたい放題に遊びを替えて遊ぶことができる。子どもも、地域の大人も来たり来なかったりと本当に自由な遊びの場になっている。



## 2. 子どもの安全部会

### 「14000のアイ運動」

平成13年に「たじりTryあぐる」で僕が初めて取り組んだ活動。ちょうど池田小の事件や、熊取の事件があったとき。田尻でも、玉を道に拾いにいった中学生の女の子が、知らないおっさんに襲われかけた事件があり、ここは町民みんなでなんとか見守ってもらわないといけないと始めた。下校の時間帯に、犬の散歩でもなんでもいいから道に出てくださいという運動。ちょうどそのときの田尻町の人口が約7,000人だったので、2つの目で「14000のアイ運動」という名前にした。見守り隊は以前からあったが、それにこの運動を付け加えた形。ちなみに田尻町の見守り隊は、全世界帯が入っている。年2回くらい、その役が回ってくる感じ。「14000のアイ運動」は、だいぶ定着してきて、いまでは下校時間になると、ポツポツ家の前に出てくれているお母さんやおばあちゃんの姿が見れるようになった。

14000のアイ運動  
ご協力よろしくお願いします!!

子どもが通学路と通学区域を確保するため、そこで、たじりTryあぐるで、みんなで目の数を増やそうと、「14000のアイ運動」を呼びかけています。田尻町の人口が約7,000人、アイは「目」という意味があるので、約7,000人の「目」を2倍に増やそうと、「14000のアイ(目・愛)」で、子どもたちや自然を守りまじよう!

- ・犬などの散歩・買い物
- ・家の周りの掃除
- ・ガーデニングの水撒き

これらに該当する方は子どもたちの登下校時間となります

午前7:30 ~ 午前8:30  
午後2:00 ~ 午後4:30頃

この時間帯にいらしてくださいようご協力お願いします。

田尻中学校地域教育協議会  
たじり tryあぐる 子どもの安全部会  
たじりあぐる事務局 田尻町役所委員会事務局 072-469-5922

### 「子ども110番の家ウォークラリー」

なにかの機会にたまたま大阪府からウォークラリーの助成金の話をもらったのをきっかけにスタート。tryあぐるの人たちは「またなにかやんの?」という感じだったが、自分でコースを考えて、そこに当てはまる10件ぐらいの家をピックアップし、子どもの歩ける距離を考えるために、自分の子どもと一緒に協力家庭を探して歩き、ようやくtryあぐるで了承をもらえた。青指や老人会とかに協力してもらってやっている。



コーディネーターの一番の手腕は、こうした催しのコーディネートももちろんだが、いかに安い予算で、かつ人を集めるかということ。この「安い予算」が難しいが、僕は町の役場や国の土木事務所とかの啓発物品の余りをもらいに行ってる。子どもはなにを気に入るかわからないので、もらえるものは選ばず、なんでももらうのが信条。前は「危険」としか書いてないシールだけでも喜んでた(笑)。それらをウォークラリーの景品にしている。前は、各家でじゃんけんやクイズをしていたが、今は330軒をまわってもらい、顔を覚えてもらうために、直接あいさつをしてもらうだけにしている。

### 「パトロール実施中」

パウチした「パトロール実施中」の紙を自転車の前かごにつけてもらってる。最初は自分で100枚手作りでパウチして作った。今は業者にしてもらって、1000枚ぐらい撒いたので、3~4軒に一軒はつけている感じ。そのため、田尻町唯一の駅の南海電車吉見ノ里駅前、プレートをつけた自転車であふれかえっているよ

うな状態になっている（笑）

ちなみに作った当時、僕は幼稚園のPTA会長だったので、うちの幼稚園の保護者につけてもらうことにした。そしたらえらいブーイングが。「一平ちゃん。それつけたら、私ら信号無視できひんやん」って（笑）。なるほど、子どもを守るシートというだけやなく、つけてる大人の意識も変えるシートでもあるんやなと思った。

### 3. 親子のきずな部会

「子どもの居場所づくり部会」は、小学生が中心。就学前の子どもが遊びに来れない。ある保護者が「安心して遊べる砂場って幼稚園だけやね」と言うてたことをきっかけに、園長先生が園庭開放をしてくれた。



それで『砂場で遊ぼう』と言うイベントをすると、子どもと一緒に、まんまとお父さんが罷にかかってやってきた。大体のお父さんはママゴトが苦手。近くのベンチで笑顔で眺めてるだけが大半。そこに僕が「なんか子どもに作ったれへん？」と声をかけると、「ええですよ」となって、しまいには裸足になって必死になってお城とかをつくるお父さんが出来上がる。そんな風に、こちらから声をかけると一緒にやってくれるお父さんってけっこう多い。大人の人を引きこむ声かけがとても大事。

『親子クッキング』は、食生活改善推進委員会の方々がやってくれてる。「食育」をしたいということで、向こうからすこやかネットに入ってきてくれた。最初は、にんじんの団子や糸こんにゃくを入れたご飯とか、低コレステロールの料理を作ったりしていたが、どうもウケが悪い。それで、そのおばちゃんとかに、「自分としてホンマはどんな料理を作りたい？」と聞いてみると、「そりゃ、手打ちうどんとかチョコレートパフェとか作りたいけどな～」「ほな、手打ちうどんつくろうや」となった。そしたら、申込は倍以上に。主催者側の思いと、参加者のニーズはずれていることが多い。それをうまくあわせるためには、「教えてやろう」「あれしてやろう」ではなくて、大人がまず楽しむということが大事なんじゃないかと思う。自分が楽しくないと、周りも楽しくない。ボランティアも一緒。昔のボランティアは“奉仕”だったので、耐えながら活動するようなイメージもあったけれど、今は自分も楽しい活動をしようと思わってきている。自分も楽しくて、参加者も楽しいというのが大切だと思う。コーディネーターとしては、そういうところを大切に活動できればいいと思う。

最初は、僕の思いつきだけでやってきたが、現在はこれらの部会に分かれて活動するようになっている。

現在は8年以上立って、僕が動かなくても、地域から「あれ、やろう」「これ、やろう」とアイデアが出てくるようになってきた。

#### (4) ボランティアさんの声

- ・土曜日が待ち遠しい！
- ・道で手を振ってくれて嬉しい！
- ・体調がよくなった。
- ・子どもが私に相談を
- ・ゲストティーチャーに呼ばれた。
- ・クラブ活動の講師に。
- ・たくさんの知り合いが増えた！



「子どもたちが道で声をかけたり手を振ってくれたりしてくれて嬉しい」というのが、一番多い声。「知り合いが増えた」というのも多い。

「子どもの相談相手になったとき」も嬉しい。長く子どもとつきあってると、元気のあるときやないときがわかる。「どないしたん？」と聞くといろいろと悩みなどを話してくれる子どもがいる。必ず何か答えを返せる訳ではないけど、話してくれるのが嬉しい。また、こっちも今度はもっとちゃんと返したろうと大人も勉強する。さらに、「あの子、こんなこと言うてたよ」と、その情報を先生に教えてあげること、学校も喜ぶ。いい循環が起きてきてる。

#### (5) ちょっとイイ話

学校開放の中で、幼稚園の子どもたちが 10 人ぐらい、お兄ちゃんとかに連れられて来てるのがあった。僕しかいなかったので、タージを使って、「折り紙」と「お手玉」を教えてくれる 2 人のおばあちゃんに来てもらい、体育館の隅で、遊んでもらった。僕は、また月 1 回ぐらい来てくれたら嬉しいな～ぐらいに思ってた、次の週、おばあちゃんが校門前で午前 9 時に待っていてくれて、「いや～、久しぶりに紅葉みたいな手をした子どもと遊んで楽しくて楽しくて。今日を一週間ずっと楽しみにしてたんや」と言ってくれたことがあった。

結果的に、子どもたちよりおばあちゃんのほうが喜んでくれてた。いろんなつながり次第で、子どもだけでなく、いろんな人が自分の居場所というのを見つけてくれているんだと思う。人間が、自分の居場所、価値観を認められている、頼りにされているとかがあると、なんかがんばれるんちゃうかなと思った出来事だった。

#### (5) 子ども（学校）に関わると・・・

- ・子どもたちの体験する機会が増える。
- ・大人たちの教育力が高まり、大人も育つ。
- ・顔見知りが増え、不審者がすぐわかるなど、地域の安全に役立つ。
- ・防災拠点である小学校のことがよくわかり、いざというときに役に立つ。
- ・先生の大変さがわかり、支援したくなる。
- ・受験戦争時代の若い先生にも、いろんな体験をしてもらえる。

なんやかんやと自分が楽しいねん！というのが大切

## (6) マル秘キーワード

成功のカケ3 (掛け算) = 「シカケ」「キッカケ」「コエカケ」

いかにシカケを考えるか。取り組みの企画や準備をしているとき、「もう出来た」と思ったところから、最後にもう一つ「シカケ」を考えるのがコーディネーターのスキルだと思う。

そして、取り組みを何かの「キッカケ」にしていけないといけない。誰かが参画するキッカケ。誰かが集まるキッカケなど、何かのキッカケにして、次につなげていったり。今ある地域のキッカケを使って集まってもらったりと。

あとはPR。広報。新聞づくりなどもあるが、口コミというのは強い。そんな「コエカケ」を大事にする。

この3つを揃えて動く活動がうまく成功すると思うので、ぜひやってみてほしい。

絆を深める3ズイ (さんずい) = 「汗」「涙」「酒」

はぐくみネットの活動は、いろんな人と一緒に作業することが多い。

そんなときに、みんなとのキズナを深めるのが「汗」「涙」「酒」。

一緒に「汗」をかいて作業する。一緒に感動、悔しさを味わって「涙」を流す。一緒に、懇親を深める (お茶・食事でも)。なにか大きなことをしたいというときには、これらをうまく使い分けて、仲間のキズナを深めてほしい。

3人寄せて文殊の知恵 = 「わか者」「よそ者」「ばか者」

この3つの人にいろんなことを聞くといい。おもしろい発想が出てくる。

「わか者」は、子ども本人。「よそ者」は地域外の人やすこやかネットに関係のない人。また、時々いてる、僕みたいな「とんでもないけどおもしろい!」ことを考えてる人間「ばか者」に話を聞くと、役に立ったり、元気をもらえることがある。

いろんな人と話をして、「えっ、そんなおもしろいことやってんの」と新しい情報をもたらったり、「そうそう、私もおんなじ失敗したわ」って情報を共有したり、「よそにも自分と同じような活動している仲間がいっぱいいるんやな〜」と元気をもらったりしている。

実際に、僕が所属している大阪府の地域コーディネーター連絡会である「OSAKAきっずな〜」や、学校と地域の連携・融合を考えてる全国組織「学校と地域の融合教育研究会」という団体には、各地域でもおもしろいことをやってる仲間がごまんといてる。

いろんな人と話をして、つながりながら、これからも一緒に教育コミュニティづくりを盛り上げていきましょう。

